未来を開く

青森産技センター報告

——49

農林部門

省力・低コスト化促進

樹形開発、衛星画像活用も

本県は豊かな自然に恵まれており、農林業が産業の大きな柱になっている。しかし、自然相手であるために安定生産が難しい上、近年では高齢化による担い手不足や「食」の多様化、健康への関心の高まりなど社会情勢が変化。さらに、温暖化や異常気象など気候変動が著しく、農林業を取り巻く環境は厳しい。

これらの課題を解決し、県内の農林業者の安定した経営と、食の安定供給のため、県産業技術センターの農林部門は県内に五つの研究所を配置し、研究職員100人余が技術開発に取り組んでいる。担い手不足が深刻化しているため、各研究所では省力化・低コスト化技術の開発を重点的に進めている。

農林総合研究所（黒石市）では、育苗や田植え作業の必要がなく安定した収量が得られる水稲V溝乾田直播（ちょくはん）栽培技術を開発、県内農家への技術導入が進んでいる。この栽培では生産費が3割、労働時間が4割削減できる。

りんご研究所（同）では、リンゴの省力栽培に向けた樹形や品種等を開発。林業研究所（平内町）では、伐採した後に再造林を進めるため、省力化と経費節減が図られるコンテナ苗による栽植など、低コスト森林施業モデルの開発に取り組んでいる。

最近では、ICT（情報通信技術）をはじめ先端技術の農林業への活用が重要視される中、工業部門と連携。衛星画像を利用した水田ごとのお米のタンパクマップや収穫時期の推定は、全国的にも最先端で研究を進めている。これを手軽に利用するためにスマートフォンやタブレットで閲覧できるシステムを開発し、利用がスタート。農家が自分の水田に肥料を効果的に施すための計算が簡単にできる「施肥なび」も開発し、活用されている。

今後は、小型無人機「ドローン」を利用した生育予測や病害虫防除法の開発、農作業の労働力軽減に向けた機械の自動化などの研究に取り組む。国や民間企業とも連携し最先端技術を取り入れて、これからも県内農林業者を支える技術開発を進めていく。

（農林総合研究所企画経営監　小林渡）

農林部門の研究所の配置場所

東奥日報　平成29年3月24日掲載

この記事は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。